



Be Creative



3足の草鞋を履いて頑張った!

校長室だより1月号その1には、共に関西学院大学への進学を決めた杉本蒼一朗君と池野琉生君に登場してもらいます。この2人は、この春、同じ大学に進学するだけではなく、共に野球部の部員であり、下宿生であるという共通点を持っています。「勉強・部活」に加え、下宿をしての3年間、まさに「3足の草鞋」を履いて、頑張った3年間でした。昨年末、2人にインタビューをしてみました。



★進む学部・将来の夢 2人が進む学部はそれぞれ違います。杉本君は教育学部教育科学科。将来は高校の英語の先生を目指します。試験では小論文と面接があり、小論文では、昭和から令和にかけての教育の変遷についての自身の意見を求められたとのこと。これまでの学年での取り組みや、野球部での活動を通して、「生徒の自主性を重んじる教育や教師のあり方」に興味関心を持っていた彼には「待ってました！」と言わんばかりの題材だったと杉本君は語ります。入試に向けての準備として、本を読んだり、先生とディスカッションをして蓄えたりしてきた知識と自分自身の中に構築してきた考えを存分に発揮することができたと言います。池野君が進むのは法学部政治学科。「具体的に社会を動かしていくことのできる政治や公務員の仕事に就きたい。『誰かのために』をモットーに、人の役に立つ仕事に将来は就きたい。」池野君はプレゼンテーション型の総合選抜で入試に挑みました。2年間、GFSⅡ・Ⅲで学び、実践を続けてきたカンボジアへの教育支援の活動を発表しました。このGFSでは「池ちゃん's」というグループのリーダーとしても、彼は奮闘します。カンボジアでは学びの施設は整備されておらず、教育の機会も不十分ながら、その中でも学ぶ意欲を持ち続ける人たちと出会い、その出会いから大いにインスピライアされたと彼は言います。

★関西学院大学の魅力は 2人が関学を選択した第1の理由が、グローバルな視点や研究、取り組みに溢れた大学であるということです。2人の共通点は、高校に入学し、英語の授業が楽しく、英語という学間に興味を持ったこと。その中で「個性的なユーモアあふれる先生たちと出会うことができた。英語を通して国際的な視野を持てる生徒を育てたい。」という夢を育てていった杉本君。一方、池野君は「国際教養を身に着け、グローバルな視点で物事を考えることのできる日本人でありたい。英語を使って、国際的な活動がしてみたい。」と自身の夢を語ります。留学制度の充実に着目したのは杉本君。「アメリカへの留学を希望しています。アメリカでは、学校での教育の在り方はもちろんですが、部活なども日本とは異なり、地域のアカデミーなどの組織の中で、より自主的・自発的に運営がされている。その中で、子どもたちがどう育てられているのか、実際に自分の目で見て学び、自分の考えの中に落とし込みたい。」と意欲を語ります。池野君は「国連の職員としてのボランティアという活動が大学の学びの中で用意されていることに着目。「自分はカンボジアの学びを通して、そこで得たものを力に進学の道を切り開くことができたので、この国連ボランティアの活動を通して、カンボジアに恩返しができたらと思っている。5か月間ぐらいの取



り組みになるが、これは絶対に行こうと自分で決意を固めています。そのための資金も必要なので、同時にバイトも考えなければ。」2人の頭の中では、様々なプランが着々と練られてきています。

★15歳で親元を離れたこと 自分自身の下宿生活も振り返ってもらいました。「よく15歳で親元を離れよう決心ができたね。」と私が問いかけると、池野君は「地元だと遊びたくなる。野球と勉強を両立させて、自分自身が自立するためにも、県外へ行こうと決めた。親から離れたいと言う思いもあったし、自分だったらやれると思っていた。」と語ります。その彼の思いの中には、特に幼い頃より、お父さんに厳しく鍛えられたという思いがあったようです。厳しく育ててもらったからこそ、やれると思ったし、親から離れて自分でやってみたいと思った。しかしながら、現実は厳しく、特に野球の練習でくたくたになって帰ってきた時には、食事はなんとか摂れても、そのあの洗濯・勉強…「しんどいことが多かった。親のありがたさが身に染みた…。」これが、彼の実感だったようです。杉本君も、同じ部屋の六川君と助け合いながら、先輩の知恵を借り、大家さんのサポートに助けられての生活でした。「下宿生活、正直、なめていました。」と杉本君。親御さんは最初、この下宿を反対されたと言います。でも、「外に出たかった、自分の力を試してみたかった、自分だったら、絶対やれると思っていた。…でも、すぐに、なめていたと実感しました。」最初はさみしくて仕方がなかった。ホームシックにもなった。「帰りてえ」と親にも弱音を吐いた。野球の練習で気持ちが追い込まれた時、結果がうまく出なかった時、気持ちが落ち込んだり、辛かったりした時は特に、家族の存在は大きいと心に沁みたと言います。友達はいたが、自分の気持ちをうまく伝えられる時ばかりではない。「家族ならぶつけておけばいいが、友達はそうはいかない」きっと池野君も同じ気持ちだったのだろうと思います。

★野球部での活動を振り返って 「競争に打ち勝っていく3年間だった。」と池野君。2年生の夏、新体制になったとたんに、練習中に大きな怪我をしてしまった池野君。3か月間は練習を棒に振り、夏休みは地元に帰つて、悶々とした日々を過ごしたと言います。野球をあきらめようか、そんな思いもわいてくる中、彼の頭には家族のことが思い浮かびます。「親に支えてもらった。なんとか背番号をもらうまで頑張りたい。自分が試合に出る姿も家族に見せたい。」そして、何より自分自身のためにも頑張りたかった。野球から学んだこと、それはたくさんあるが、この3年間で学んできたことは努力すること、逆境に勝つことだった。3年生の夏の試合、手にした背番号。胸に誓ったことはただ一つ、自分自身のバットで、一振りで自分の思いを示すことだったと池野君は言います。杉本君にとっても、闘いの3年間でした。勝利至上主義の考え方方が残っていたり、古き風習や慣習も残ったりしているのが野球の世界。学ぶことも多く、その中で団結力も生まれるが、良いことばかりではない。悩みをどう克服していくのか、どうやったら、取り組みをよりよいもの、効果的なものに変えられるか。何度も考えたと彼は言います。一人で抱え込むことは苦手。仲間に語りかけて、みんなの考えを聞いて、解決策はあるのか、効果的な考えがあつたら自分の中に取り込み、最適解を求めてきたが、どうにも越えられないものもあった。悩んだ時に最終的に頼りにすべきものは自分の信念。自分なりにやってみよう、無理に人と合わせることはない、これが考えた末に彼がたどり着いた結論でした。

★後輩たちに伝えたいこと 最後に後輩たちに伝えたいことを聞いてみました。2人の思いは共通していました。池野君は言います。「努力すれば、大抵のことはできる！」杉本君は「つらいこともあるが、耐えた先には自分の思い描く未来が待っている。」と言います。自分たちの経験から彼らが紡ぎだした後輩たちへのメッセージです。



彼らの美浜での3年間の生活がまもなく幕を閉じます。彼らが生まれ故郷に帰つてしまふと、この美浜での生活が小さな思い出になってしまいそうで、「何となく寂しくなるね。」と言うと、即、「教育実習で帰つてくるから。」との言葉が返ってきました。待つているからね！「関西に帰つて、自分自身がどう変わつていくのか、それも楽しみ。」彼ら自身も自分の成長にワクワクしていることを頼もしく思いました。どうぞ、頑張つて！